

P2-529 当科における副効用を期待した低用量ピル処方 の現況

埼玉医大

菊地真理子, 山下真紀子, 羽生真由子, 三木明德, 梶原 健, 岡垣竜吾, 石原 理

【目的】1999年に低用量ピル(OC)が処方可能となって5年が経過した。しかし日本における処方件数は、諸外国と比較すると例外的に少ないことが知られている。今回、当科におけるOC処方の現況を調査し、今後のOC普及へ向けた適切な取り組みの方向性を明らかにすることを試みた。【方法】2003年7月から2005年5月の約2年間に当院でOCが処方された全症例について、OC投与の目的と服薬コンプライアンスを中心に検討した。またデータはプライバシーに配慮し、匿名化してその処理をおこなった。【成績】この期間にOCは146例に対して処方され、その内訳は三相性製剤(ethynyl estradiolおよびlevonorgestrel)119例および一相性製剤(ethynyl estradiolおよびnorethisterone)27例であった。なお、経過中に三相性から一相性へ変更例が11例、一相性から三相性へ変更例が1例含まれる。OC投与期間は3ヶ月以下が56例、4-6ヶ月が15例、7-12ヶ月が28例、13ヶ月以上が47例であったが、1クールのみで使用を中止した例が28例(19.2%)含まれた。月経困難症や子宮内膜症の症状改善がOC使用の目的のひとつとなっている症例がほとんどで、避妊のみを目的としてOC処方が行われた症例はわずか5例であった。【結論】副効用を期待してOCの処方された症例において、服薬コンプライアンスは良好で、服薬開始した多くの症例において長期間の服薬が継続された。OCの副効用に関する理解の促進が日本におけるOC普及に有効である可能性が示唆される。

P2-530 低用量ピルはどのように受け入れられているのか。神戸大医学医療国際交流センター国際保健¹, 茶屋町レディースクリニック²
松本安代¹, 山辺晋吾², 浅原彩子², 横田 光², 萬代喜代美², 出田和久²

【目的】低用量ピルに対する認識、ニーズを調査する。【方法】対象は2004年5月より2005年4月の間に低用量ピルの服用を開始した1088人とした。問診表、診療録より1.年齢、2.内服の目的、3.内服の契機、4.妊娠歴、5.中絶歴を調べた。質問形式は2.が避妊および副効用として月経痛、過多月経、PMS、にきび、月経不順の症状緩和の全6項目の中から複数回答可とし、3.が新聞・雑誌、家族・友人の勧め、医師の勧め、インターネット情報の中から1項目の選択、4,5については有、無の二者択一とした。【成績】対象患者の平均年齢は27.5±5.8歳で、避妊目的が372人(34.2%)、副効用目的が600人(55.1%)、両者目的が116人(10.7%)であった。避妊目的群の平均年齢は26.8±5.1歳で副効用目的群の28.3±6.2歳より明らかに低かった。副効用の中では月経痛(54.9%)、月経不順(42.3%)の改善目的が多く、PMS(19.4%)、にきび(16.3%)の順だった。30歳未満では避妊目的が最も多い一方、30歳以上では副効用の月経困難や不順の改善目的が多かった。避妊目的群の中絶歴は23.9%と副効用目的群の7.9%より明らかに高かった。全体で中絶歴/妊娠歴の比率は15~20歳で0.89、21~25歳で0.92と非常に高かったが、26~30歳で0.57、31~35歳で0.66、36~40歳で0.52、41歳以上で0.38と低下した。内服の契機はインターネット情報が614人(56.4%)、医師の勧めが236人(21.7%)、家族・友人の勧めが138人(12.7%)、新聞・雑誌情報が86人(7.9%)だった。【結論】低用量ピルは避妊目的のみならず月経随伴症状の改善として服用されており、避妊目的で内服する者の中絶歴は高かった。また内服の契機としてインターネットが重要な情報源であった。

P2-531 月経困難症に対する漢方薬(当期芍薬散+芍薬甘草湯の周期併用療法、桂枝茯苓丸)の使用経験について

沖繩赤十字病院

山城貴恵, 伊志嶺梢, 吉秋 研, 前里宗永

【目的】今回、月経困難症に対し漢方薬(当帰芍薬散、桂枝茯苓丸)を使用した症例、また芍薬甘草湯と当帰芍薬散の周期的投与療法の効果について検討したので報告する。【方法】平成15年7月より平成16年7月までに受診した機能性月経困難症または器質性月経困難症の患者24人に対し、証にあわせて当帰芍薬散、桂枝茯苓丸、芍薬甘草湯と当帰芍薬散を処方した。当帰芍薬散、桂枝茯苓丸はそれぞれ7.5g/日分3で処方した。芍薬甘草湯と当帰芍薬散は、月経7日前から芍薬甘草湯を7.5g/日分3で内服を開始し、月経終了後より当帰芍薬散7.5g/日分3に内服を変え、次の月経7日前の芍薬甘草湯内服に変わるまで内服を継続した。月経困難症に対する効果については、症状の改善を認めたものを効果あり、消炎鎮痛剤を全く必要としなくなった場合を著効とした。【成績】治療を行った24人の内訳は、当帰芍薬散8例、桂枝茯苓丸8例、当帰芍薬散+芍薬甘草湯8例であった。月経困難症の症状に効果があったのはそれぞれ7/8例(88%)、5/8例(63%)、8/8例(100%)であった。また著効であったのは、2/8例(25%)、2/8例(25%)、4/8例(50%)であった。全ての症例で副作用は認められなかった。【結論】当帰芍薬散または桂枝茯苓丸のみの処方に比べ、周期療法の方が月経困難症の症状改善により効果が認められた。芍薬甘草湯の鎮痛・鎮痙効果が、月経前後で使用することによってより効果が出ると考えられた。桂枝茯苓丸は実証の月経困難症に使用しているが鎮痛効果のある芍薬が他の方剤に比べると少ないため、単剤での使用だと鎮痛効果が弱いと考えられた。